

「松花堂画寄合賛絵巻」の模写本について

田中敏雄

Copy of “Shiyokado ga yoriaisan emaki”

TANAKA Toshio

## 「松花堂画寄合賛絵巻」の模写本について

田中敏雄

はじめに

大坂で江戸時代後期に活躍した四條派の画家の長山孔寅について調査していた時に、長山孔寅が「松花堂画寄合賛絵巻」を図様も賛も、そして、落款・印章までも模写している作品を見る機会をえた。さらに、絵は筆者不詳であるが、「松花堂画寄合賛絵巻」の図様を模写して、絵に当時の京都の文人や僧侶が賛をした画巻を見た。又、卷子本でなく、「松花堂画寄合賛絵巻」の一図を模写した軸物作品を幾つか写真等で見る事があった。筆者不詳の「昭乗画寄合賛絵巻」の模写本について紹介することを主として、他の軸装の模写本の作品についても少し触れてみたい。

### 一、「松花堂画寄合賛絵巻」について

まず初めに、「松花堂画寄合賛絵巻」とはどのような作品なのかを述べる。この作品は松花堂昭乗が花鳥・蔬果・人物など二十四図

を描いた画卷である。その二十四図の内十八図に近衛信尋・烏丸光廣などの公家の人達や澤庵宗彭・江月宗玩などの禪僧や小堀遠州のような茶人や林羅山のような儒者などの賛を伴う画卷であった。

松花堂昭乗（一五八四～一六三九）は桃山時代から江戸時代初めにかけて活躍した石清水八幡宮の社僧である。松花堂昭乗は多才な人で、近衛信尹（一五六五～一六一四）と本阿弥光悦（一五五八～一六三七）とともに「寛永の三筆」と称された。松花堂昭乗は各種の書法を身に付けるとともに、滝本流という独自の書法で能書家として著名である。又、絵の世界では狩野山楽（一五五九～一六三五）と親交を結び、狩野山楽から絵を学んだとも伝えられている。しかし、松花堂の画の目指すところは狩野派様式でなく、減筆を主とした軽妙洒脱な独自の美意識の画法で生み出された絵画は江戸時代の画家や茶人に受け入れられた。茶人としての松花堂昭乗は茶人として著名な小堀遠州とは兄の中沼左京を介して姻戚関係にあるだけでなく、小堀遠州の茶会にも幾度となく招かれている。『遠州歳帳』には松花堂の絵画などが多く記載されている。小堀遠州と

の交友の中で、松花堂の茶の湯が育まれたのである。石清水八幡宮の滝本坊では松花堂以前から茶の湯が盛んで茶道具も多く集まっていたが、松花堂が滝本坊に住み、茶人として著名になるとともに滝本坊の茶道具も「八幡名物」として茶の世界で高く評価されるようになった。

このように、松花堂昭乗は書家・画家・茶人と多才な能力を持った人で、中国の文人という概念では捉えられないが、広い教養を身に付けた文人であると言える。そのような松花堂が絵を描き、同時代の著名な文化人達が賛をした「松花堂画寄合賛絵巻」は古くから知られていて、延宝九年（一六八一）に作成された『滝本坊代々什物之覚』（京都女子大学蔵）に既に「寄合書一巻」（注1）として記載されている。そして、それ以降の滝本坊蔵帳には「画卷物 惺々翁」や「惺々翁 画卷物」として記載されて、「八幡名物」として茶の世界でも評価されていた。さらに、大茶人の松平不昧編の『古今名物類聚』に「八幡七種の名物」として、花白河硯や、碁盤香合々などとともに「寄合書巻物」としてこの「松花堂画寄合賛絵巻」が記載され、茶道具として高く評価されていた。そして、この「松花堂画寄合賛絵巻」は「八幡名物」として永く滝本坊に伝えられていたが、後に、大阪の粹人であり、茶人でもあった平瀬露香の平瀬家の所蔵となった。その後、川畑 薫氏によると「昭和の中ごろまで卷子の形で伝わっていたが、現代は分割され、諸家に分蔵されている。」（注2）と記している。現在は元の卷子本で見ることが出来ず、個々に軸装され、展覧会に出品された数点の作品を見ることが出来る（注3）。

画卷の全容については雑誌『武者の小路』（第三年八月号、一九三八年）に全図が掲載されている。口絵解説に「本絵巻は滝本坊を出て、島津侯の所蔵となったものである。後、南部藩の家臣に引き出物とせられたが、転々して平瀬露香翁の有となった。」とある。又、「本絵巻に見るが如く彩色を施したるものには落款を忌諱し、水墨の妙に翁の自己充足を得たものと考え得るのであるまいか」と記す。そして、「松花堂画寄合賛絵巻」の内容を記すと、

- 一 竹画 近衛信尋公賛
- 二 雉子画 中院通村卿賛（図1）
- 三 鶏画 烏丸光廣卿賛
- 四 胡蝶画 玉室・澤庵・江月賛
- 五 芙蓉画 澤庵賛
- 六 葡萄画 玉室賛
- 七 菊画 江月賛
- 八 梅画 彩色
- 九 萩鹿画 長嘯子賛
- 一〇 朝顔画 澤庵賛
- 一一 雁画 宗甫賛
- 一二 梔画 彩色
- 一三 竹雀画 相国寺顯暲長老賛
- 一四 鳩画 林 道春賛
- 一五 竹四十雀画 彩色

- 一六 鳥画 堀 正意賛
- 一七 水仙画 彩色
- 一八 茄子画 玉室賛
- 一九 瓜画 江月賛
- 二〇 船子画 天祐賛
- 二一 舟画 江月賛
- 二二 菊画 彩色
- 二三 栗画 江月賛
- 二四 水月画 落款なし

以上の全て二十四図（紙本）である。『武者の小路』と展覧会の図録に掲載された写真から二十四図の内十九図は墨画ないし、墨画に部分的に淡彩を施した絵で、減筆による軽妙な筆使いと墨の濃淡彩、滑稽味のある洒脱な人の表現には習気や俗気がない。他の五図は院体の折枝画風に精緻な彩色画で賛がない。この「松花堂画寄合賛絵巻」の制作年代であるが、中部義隆氏は「松花堂にとっても、晩年の作品と考えられる。」（注4）とされる通り、この画巻には「隠士松花堂」の署名があることから松花堂が寛永十四年（一六三七）十二月に滝本坊を乗淳に譲り、自ら松花堂を建てて隠居してから、松花堂と称したので、この画巻も寛永十四年十二月からこの画巻の「鶏図」の賛者の烏丸光廣が寛永十五年（一六三八）七月に没しているし、松花堂は寛永十六年（一六三九）九月に没しているので、「松花堂画寄合賛絵巻」は松花堂の最晩年の作品である。

二、「松花堂画寄合賛絵巻」の模写本（個人蔵）について

今度、紹介したく思う作品は前述した「松花堂画寄合賛絵巻」の松花堂が描く絵を忠実に模写したものに、模写した当時の儒者や国学者や僧侶達が賛をした作品で、箱には作品名が書かれてなく、目録が付けられている。箱にも絵にも作者の名はなく、絵を模写した人の名は不詳である。絵も賛も落款印章までも「松花堂画寄合賛絵巻」を模写した後に述べる長山孔寅筆の模写本のような作品ではないが、「松花堂画寄合賛絵巻」を真似て、新しい形での「寄合賛絵巻」にしたものである。

附属している「目録」の内容を記すと

目録

竹

彩 雉子 今小路民部卿法眼行章

彩 鶏 梅月堂香川景樹

彩 蝶 故小沢芦庵高弟

小川布淑

前波黙軒

芙蓉

葡萄

小川大藏卿法印彦澄

彩 梅雀

柚木太淳

萩鹿 知足庵道覚

薺 山下重榮

水邊鳩 金剛院権僧正奥應

彩 山梔子鶯 皆川文蔵愿

竹雀 伴高蹊

鳩 村瀬嘉右衛門源之丞

彩 竹画眉鳥 中嶋織部徳方

叭々鳥

彩 水仙 菩提院大僧都志岸

茄子 書博士岡本甲斐守加茂保考

瓜 中山前大納言愛親卿

船子 天龍寺 竜潭西堂

乗船禅僧 南禅寺真乗院 宗弼西堂

彩 菊 坂元鈞閑齋遊焉

栗 中嶋文吉徳観

水月

この目録には賛者が記されていない箇所が、竹、芙蓉、葡萄、叭々鳥、水月と五か所あるが、その内、水月以外は全て賛があり、賛者の名の判るものもある。この目録はこの模写本が作成された時に作られたものでなく、後に書かれたものかも知れない。

次にその内容について記すと「松花堂画寄合賛絵巻」は紙本であるが、この模写本は絹本である、卷子の縦の長さは三三、〇cmである。法量は横幅を示す。

1、竹図 墨画 五七、二cm (図2)

虚心寫出 両竿竹 不滅不生 霜節堅「印」「印」  
賛者 不詳

2、雉子図 墨画淡彩 五五、六cm (図3)

かり人の入野の ききす 打忍ひ はるを社ゑね 妻や こ  
ふらむ 行章  
賛者 今小路行章

3、鶏図 墨画淡彩 五一、五cm (図4)

大そらにとひ立 かねてうち羽ふき かけそと啼か 哀れな  
りけり 景樹  
賛者 香川景樹 (一七六八〜一八四三)

京都の歌人

4、夢蝶図 この図は切り取られていて無し。

5、芙蓉図 墨画 七二、一cm (図5)

其葉葳蕤霜照夜 此花爛熳炎燒秋 山口正風「印」  
賛者 山口正風

6、葡萄図 墨画 六一、四cm (図6)

- 西域誰傳紫玉枝 秋季馬乳帶霜肥 不憂酒渴相如苦 一嚼清  
冷味最奇 橘山題「印」  
賛者 畑 柳敬（二七五六〜一八二七）  
京都の医者 儒者
- 7、菊図 着色 四八、〇cm（図7）  
いろいろことに〇〇〇菊のうつしゑハ あきなき時も かれす見  
るへき 彦澄  
賛者 小川彦澄
- 8、梅雀図 着色 三七、〇cm（図8）  
〇〇猶来細禽夢乎醒 曉風吹彩後梅香凝〇腥 鶴橋 柚木  
太淳「印」「印」  
賛者 柚木太淳（二七六二〜一八〇三）  
京都の眼科医
- 9、萩鹿図 墨画 六二、九cm（図9）  
色ふかくにほへる はきの花つまに むつれてあそふ 野辺  
のさをしか 道覚  
賛者 知足院道覚
- 10、薺図 墨画 五五、八cm（図10）  
このあきとはなはしらし 夕くれを またてうつろう花の
- あさかほ 重榮  
賛者 山下重榮
- 11、雁図 墨画 四九、〇cm（図11）  
秋風を翅に かけつつうら枯の あしの入江に 落るかりか  
ね 真應  
賛者 金剛院真應
- 12、山柁鷺図 着色 四〇、二cm（図12）  
自経消臘雪林苑鎖 煙霞芳意殊凡卉獨 開六出花 皆川愿  
題「印」「印」  
賛者 皆川淇園（一七三五〜一八〇七）  
京都の儒学者
- 13、竹雀図 墨画 五七、一cm（図13）  
ちからなき 竹のさえたに あそぶめり 起居かるけに み  
ゆるす、めは  
蒿蹊「花押」  
賛者 伴 蒿蹊（一七三三〜一八〇六）  
京都の歌人、国学者
- 14、鳩図 墨画 五七、二cm（図14）  
鳩栖桑樹枝 婦何之欲呼無處 所縮項空相思 之熙「印」

賛者 村瀬栲亭(二七四四〜一八一九)  
京都の儒者

15、竹眉鳥図 着色 四七、九cm (図15)

長喙華毛易誤躬 待人苦々含彫籠憐 汝獨來阿堵裏柔梢 自  
在喙春蟲 徳方拝題「印」

賛者 中嶋泰志(二七四七〜一八一六)  
京都の儒者

16、叭々鳥図 墨画 五八、三cm (図16)

江南春樹雨濛々 鸚鵡 多懷語曉風莫謂羽毛 設文采嗟它鸚鵡

鎖重籠 橘州 禎「印」「印」  
賛者 畑 柳泰(二七六五〜一八三二)

京都の医者

17、水仙図 着色 四七、七cm (図17)

百草花中第一名氷肌雪 骨月魂清風惜獨有寒梅 似曾結芳盟  
為弟兄 釈志岸拝題「印」「印」

賛者 菩提院志岸

18、茄子図 墨画 六〇、〇cm (図18)

二月のふりにはあらぬ はつなすひ多か苑生にか 折えたり  
けん 保考賛

賛者 岡本保考(二七四九〜一八一八)

京都の書家

19、瓜図 墨画 五八、三cm (図19)

鵝溪寫書一蒼 稔知是春門處 士疇不用灌培 生意勤何開  
納履有人例 愛親

賛者 中山愛親(一七四一〜一八一四)  
公卿 正二位權大納言

20、船図 墨画 四八、三cm (図20)

小朶知〇處 洞庭水來波 渡頭縱有待 千古汲人過 峩眉竜  
潭謹題「印」「印」

賛者 天龍寺竜潭西堂

21、船子図 墨画 五二、一cm (図21)

上無片尾蓋霜頭下 有長江可擲釣偶遇 金鱗禹碧浪山遙水  
闊荻蘆秋 宗弼「印」「印」

賛者 南禅寺宗弼西堂

22、菊図 墨画 五八、七cm (図22)

秋色菊形及一枝 絹上妍不霜瓊座 碎長賞入詩篇 一元真賢題  
「印」

賛者 坂元鈞閑齋

23、栗図 墨画 四七、四cm (図23)

寫真故謝寫嬋娟 一種秋 容宛可眸想看寒巖幽谷 莫葉間山

蝟座疎烟 規拜題 「印」

賛者 中嶋棕隠(一七七九)一八五五)

京都の儒学者、漢詩人

24、水月図 墨画 七〇、六cm (図24)

賛なし

この模写本は原本の「松花堂画寄合賛絵巻」の第四図に当たる「夢蝶図」の場面がない。目録には記載されているので、制作時はあったが、後に切り取られたのであろう。また、模写本では「松花堂画寄合賛絵巻」の「船子図」と「船図」が前後逆になっている。

原本の「松花堂画寄合賛絵巻」は寛永時代の公家や茶人や禅僧などの人々の賛があつたが、この模写本は京都在住の岡本保考や伴蒿蹊という国学者や中嶋棕隠や村瀬栲亭という儒者、さらに畑柳泰や柚木太淳のような医者や香川景樹のような歌人さらに著名な寺院の僧侶などが賛をしている。この模写本の制作年代であるが、絵の筆者は不明であるが、賛者から推定すると、賛者の中で生没年が明らかかな人の中で、最も早く没しているのは医者の中嶋太淳で、没年は享和三年(一八〇三)である。また、賛者の中で生年が最も遅い人は儒者の中嶋棕隠で安永八年(一七七九)である。この柚木太淳の没年と中嶋棕隠の青年を参考にして、制作年を想定すると安永八年

(一七七九)から享和三年(一八〇三)の間となる。中嶋棕隠の若年の頃として、官制年代の終わりから文化年代の初めころ、即ち、一七〇〇年の終わりから一八〇〇年の初め頃かと想定される。又、この模写本を依頼した人物の存在も気になるところである。この模写本は寛政から文化にかけての当時の著名な京都の国学者や儒者や歌人や医師や著名な寺院の禅僧が賛をしていて、松花堂の「松花堂画寄合賛絵巻」の賛者の領域の広さに似て、ただ絵の模写だけでなく、賛者を含めて原本の「松花堂画寄合賛絵巻」を大いに意識してその精神までも受け継ごうとしたのではないか。

### 三、その他の模写本について

前述した筆者不詳の「松花堂画寄合賛絵巻」の模写本の他にも「松花堂画寄合賛絵巻」を模写した作品が幾つか存在している。それらについて述べてみたい。

① 長山孔寅筆「松花堂画寄合賛絵巻」の模写本(紙本墨画、着色、二九、〇×九九、九cm 八幡市立松花堂美術館蔵)(図25)

この作品については既に八幡市立(松花堂美術館)の『はちコレ 八幡のコレクション』展(平成二十六年十月〜十二月)の図録に三点の作品が写真掲載されて紹介されている。又、筆者も長山孔寅の研究で紹介したことがある(注5)。

呉春に絵を学んだ四條派の画家の長山孔寅(一七六五)

一八四九)によって、模写された作品である。前述の筆者不詳の模写本と異なり、「松花堂画寄合賛絵巻」の絵も賛も、さらに、松花堂の落款・印章までも違わずに正確に模写している。本模写本は「松花堂画寄合賛絵巻」の二十四図より少なく、初めの「竹図」から「竹に四十雀」までの十五図である。そして、長山孔寅筆の模写本には巻物そのものには長山孔寅の落款・印章はなく、箱書きに「当坊傳來寄合讚松花堂画巻物こたひ浪花長山孔園なる人模写 瀧本坊(印)」とある。

『浪花長山孔園』の『孔園』は長山孔寅が狂歌の時によく用いた名前である。長山孔寅は秋田から出て、京都で呉春について画を学び、一八〇〇年の初め頃に大坂に来て、絵と狂歌で活躍した。この模写本も『浪花孔園』とあることから大坂に来てからの制作である。長山孔寅は『古画備考』の中「鳥羽晝放屁合戦巻物模本頗達筆也」とあり、模本制作に『頗る達筆』であったとされる。長山孔寅の模写作品として、伊藤若冲(一七一六～一八〇〇)の鶏の絵を写した「群鶏図屏風」(『個人蔵』)がある(注6)。「古画備考」の記述を首肯するに値する若冲の鶏の模写である。

長山孔寅の「松花堂画寄合賛絵巻」の模写本は八幡市立松花堂美術館蔵本だけでなく、他にもあることを川畑 薫氏(八幡市立松花堂美術館)の御教示によって知った。この模写本については未見である。川畑氏の資料提供によって、財団法人宇野茶道美術館での「寛永に開花した茶人たち」展の

図録(平成九年十二月発刊)に「松花堂画寄合賛絵巻」の第四図に当たる「夢・胡蝶図」の写真が掲載されていて、「松花堂画寄合賛巻物 模 長山孔寅 江戸時代 縦二八・四 長一四一・〇」とある。写真を見た限りでは松花堂美術館蔵本と同じく、夢の字や蝶や賛と落款・印章全て「松花堂画寄合賛絵巻」を忠実に写したものであることが分かった。現在には福井市愛宕坂茶道美術館の所蔵である。

② 勝部如春斎筆「花鳥ノ図」(絹本墨画 二八・九×四一・〇 池田市立歴史民俗資料館蔵)(図26)

この「花鳥ノ図」には「松花堂画 台賜如春斎模寫(印)」とあり、画題は「花鳥ノ図」とあるが、描かれているのは「鳩図」である。「松花堂画寄合賛絵巻」の第十四図にあたる「鳩図」の図様のみを模写した作品である。この模写本の「鳩」の図様は長山孔寅の模写本よりもふっくらして、「松花堂画寄合賛絵巻」に似ている。「松花堂画寄合賛絵巻」は紙本であるが、この模写本は絹本であり、賛も「松花堂画寄合賛絵巻」は林羅山であるが、この模写本は芝山持豊(一七四二～一八一五)の賛「鵲の巢をわがたのむ家鳩にならふいもせのみちはむつまし 権中納言持豊讚」がある。

この模写本を描いた勝部如春斎(一七二一～一七八四)は江戸時代中期に西宮(兵庫県)で活躍した狩野派の画家である。勝部如春斎が没したのが、天明四年(一七八四)であ

③

り、賛者の芝山持豊が権中納言に任せられるのは寛政十一年（一七九九）であるので後の賛である。そして、勝部如春齋が九条家から「如春齋」の号を賜るのは明和元年（一七六四）であるので如春齋の没年の天明四年（一七八四）の間の制作とおもわれる。

土佐光孚の模写本

1、土佐光孚筆「芙蓉図」（紙本墨画 二八・四×六六・四cm 八幡市立松花堂美術館蔵）（図27）

本図には「畫所預従四位下土佐守藤原光孚模（印）」とあり、「松花堂画寄合賛絵巻」の第五図の「芙蓉図」の図様や沢庵の賛や松花堂の落款・印章に至るまで忠実に模写している。土佐光孚（一七八〇～一八五二）は土佐光貞の長男として生まれ土佐派の画家で、文化三年（一八〇六）に土佐守に、文政十二年（一八二九）に従四位下に天保十一年（一八四〇）に従四位上に任じられているので、この「芙蓉図」は文政十二年（一八二九）から天保十一年（一八四〇）の間の制作と思われる。

この他に古書目録や電子版で目に触れた作品を挙げると、2、土佐光孚筆「菊花図」（絹本着色 三一・五×六〇cm）（注7）本図は「松花堂画寄合賛絵巻」の第二十二図の「菊図」を模写した作品で、「模松花堂図 畫所預従四位下土佐守藤原光孚（印）」とある。「松花堂画寄合賛絵巻」には賛はないが、本作品には小堀宗中（一七八六～一八六七）の賛がある。

3、その他参考までに電子版で知りえた土佐光孚の模写作品は

土佐光孚筆「水仙図」（着色）

「松花堂画寄合賛絵巻」の第十七図の「水仙図」を模写した作品で、「畫所預従四位下土佐守藤原光孚模（印）」の落款・印章があり、図様と松花堂の落款・印も模写している。「松花堂画寄合賛絵巻」には賛はないが、本図には和歌の賛があるが、賛者は不明

○ 土佐光孚筆「雉図」（紙本・二八・三×五二cm）

「松花堂画寄合賛絵巻」の第二図の「雉図」の図様と松花堂の落款・印、さらに中院通村の賛も模写する。

四、結びにかえて

松花堂昭乗筆の「松花堂画寄合賛絵巻」は長山孔寅や勝部如春齋や土佐光孚さらに筆者不詳の画家によって模写されている。長山孔寅は四條派の画家であり、勝部如春齋は狩野派の画家で、土佐光孚は土佐派の画家による模写である。狩野派や土佐派や四條派などの画家達は師や流派の先達たちの主題や画風を粉本から学び、それぞれの流派の主題や画風の特徴を生かして模写される。しかし、松花堂は各画派の師風遵守の専門画家でなく、木村時員の『三晝庵隨筆』に「松花堂の畫しろうとにて候、しかれど共自畫賛共は面白きも有之由に候」と記す。桑山玉州の『絵事鄙言』では「物形簡潔ニシ

テ類二画家ノ習気ヲ避ケタリ」とある。また、白井華陽の『画乗要略』に「自ら性靈を發舒し、筆に随いて落墨す。風味清曜、世を挙げて之を雅量す。」とある。松花堂の絵は専門画家の画派としての様式の癖や特色にまみえず、素人的で、絵は清く輝きをもち、あらゆる人々に嫌味なく受け入れられたのである。そのことが、絵画面で松花堂の絵が受け入れられ、「松花堂画寄合賛絵巻」も流派の異なる画家達によって受け入れられ、模写されたと思われる。

さらに、茶の世界にあっても、この「松花堂画寄合賛絵巻」は茶人としても著名な松花堂が絵を描き、茶人の小堀遠州や江月宗玩、沢庵宗彭という茶に精通した禅僧達が絵に賛をしている画巻である。そして、この「松花堂画寄合賛絵巻」は古くから松花堂のいた滝本坊に伝わり、各種の「滝本坊藏帳」に記載されて、「八幡名物」として評価されていた。さらに、大茶人の松平不昧が茶道具の評価を決めた『古今名物類聚』に「花白河硯箱」<sup>〃</sup>「碁盤香合」などと伴に「八幡七種の名物」として記載されている。近代になって、茶人の平瀬露香の所蔵となった。このように「松花堂画寄合賛絵巻」は茶の世界でも評価の高い作品であった。この画巻が分断された理由は不明であるが、茶掛けとして用いられるために切られたかもしれない。軸装の模写本は茶掛けとして制作されたかもしれない。松花堂の絵画の本質と茶事との関係について佐々木丞平氏・佐々木正子が「松花堂昭乗の絵画―その洗練

の美学―」で論じられている(注8)。

「松花堂画寄合賛絵巻」の模写本の模写年代は筆者不詳の模写本は寛政年代の終わりから文化年代の初めである。長山孔寅の模写本は文化年代以降と考えられる。又、勝部如春齋の模写本は明和元年(一七六四)から天明四年(一七八四)の間の作である。土佐光孚の模写本は文政十二年(二八二九)から天保十一年(一八四〇)の間の制作と考えられる。以上各種模写本で勝部如春齋の模写本の制作年は他のものと比べて少し早い、他の模写本は寛政年代の終わりから文化・文政時代である。文化元年・二年に「松花堂画寄合賛絵巻」に仕様がよく似た『松花堂画帖』が出版された(注9)。その跋文を書いた細合与齋について山口恭子氏は「この画帖の刊行によって昭乗の芸術を世に伝えたいとの学与齋の意向も述べられている」と記している(注10)。この細合与齋については「細合半齋年譜」には「半齋の同族と思はれるが、詳しくはわからない。」とある(注11)。松花堂に私淑し、その書を学び、「滝本流中興」と称された細合半齋(一七二七―一八〇三)は松花堂の書法の滝本流の啓蒙に努め、『滝本某』を寛政八年(一七九六)に刊行した。山口恭子氏は「細合半齋は昭乗の書を多く版行し滝本流の中興に努めたが、片や学与齋は、昭乗の絵を出版してその画業を世に広く知らしめる役割を果たしたのである。」(注12)と記す。このように「松花堂画寄合賛絵巻」の各種の模写本の制作された時代は松花

堂昭乗の書や絵画が刊行され普及に力が注がれ、松花堂顕彰の風潮が生まれた時代でもあった。

以上、松花堂の絵画は風味清曜で万民に受け入れられる嫌味のない絵画様式であり、「松花堂画寄合賛絵巻」は茶の世界にあつては茶道具として評価が高く、書と絵で松花堂を顕彰しようとする風潮の見られた時代、それらの要因が各種の「松花堂画寄合賛絵巻」の模写本を生んだと思はれる。

註

- (注1) 矢崎 格「諸本集成 八幡滝本坊藏帳」(「茶の湯 研究と資料」第七号 一九七三年)
- (注2) 川畑 薫「松花堂昭乗と小堀遠州」(「野村美術館研究紀要」第二十六号)
- (注3) 「松花堂昭乗―茶湯の心と筆墨」展図録(天和文華館 平成五年)
- 「松花堂昭乗 書画のたのしみ」展図録(八幡市立松花堂美術館 平成二十九年)
- 「フルーツ&ベジタブルズ」展図録(泉屋博古館 二〇一八年)
- (注4) 「松花堂昭乗―茶湯の心と筆墨」展図録の解説(19) 24)
- (注5) 拙論「長山孔寅の研究―作品について―」(「藝術文化研究」第二十三号 大阪芸術大学大学院)
- (注6) 「アニマル・ワールド展」(静岡県立美術館 二〇一四年)の図録に掲載
- (注7) 「第三十一回 銀座古書の市」図録 二〇一五年
- (注8) 佐々木丞平・佐々木正子「松花堂昭乗の絵画―その洗練の美―」(「茶道文化研究」第四輯 平成十年)
- (注9) 鶏図や船図や画賛のある作品そして最後の図として両者に水月図が描かれている。
- (注10) 山口恭子「松花堂画帖」の刊行と諸本」(「日本文学誌要」第八十一号 二〇一〇年 法政大学国文学会)
- (注11) 水田紀久・多治比郁夫「細合半齋年譜」(「大阪府立図書館紀要」第一号 昭和三十九年)
- (注12) (注9) 前掲論文

この文を書くにあたり、川畑 薫氏(八幡市立松花堂美術館)、又、所蔵者の方々にお世話になりました。お礼申し上げます。

图6 葡萄图



图1 雄子画「松花堂画寄合替絵巻」  
の内(八幡市立松花堂美術館蔵)



图7 菊图



图2 竹图



图8 梅雀图



图3 雄子图



图9 获鹿图



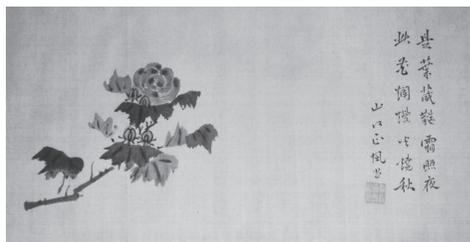
图4 鶏图



图10 薔图



图5 芙蓉图



「松花堂画寄合賛絵巻」の模写本について

図16 叭々鳥図



図11 雁図



図17 水仙図



図12 山樞堂図



図18 茄子図



図13 竹雀図



図19 瓜図



図14 鳩図



図20 船図



図15 竹眉鳥図

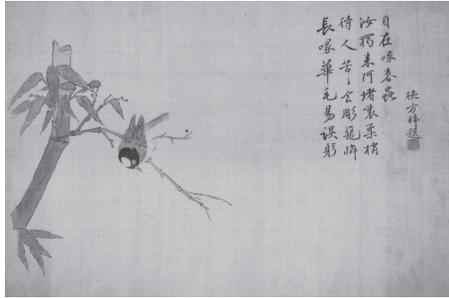


图26 勝部如春画鳩图



图21 船子图



图27 土佐光字筆芙蓉图



图22 菊图

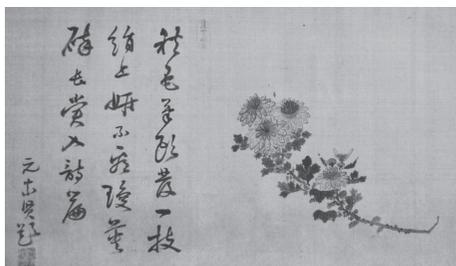


图23 栗图



图24 水月图

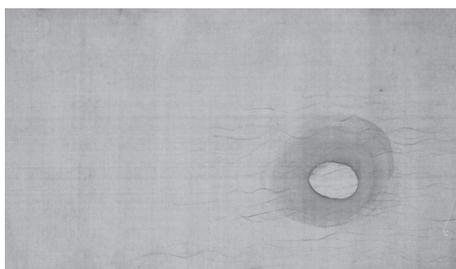


图25 長山孔寅筆葡萄图

